

2024年度
情報経営イノベーション専門職大学
入学者選抜試験 一般入試C日程

国語

注意事項

1. 試験時間は60分。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせること。
4. 解答用紙には解答欄以外に受験番号等の記入欄があるので、監督者の指示に従ってそれぞれ正しく記入すること。
5. 解答は、問題に対応した解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 問題冊子は持ち帰らないこと。
7. 試験終了まで退出しないこと。

—
次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

学校教育は公的に提供されることが多いですが、公的部門の宿命か、しばしばその質が問題になることがあります。民間と比べ公的部門は価格などの調整が行われにくい^①ため、競争原理が働きにくいことが原因です。公立学校の質向上を目指し、学校間競争を促進することが目標とされる^②ことがあります。

日本における学校間競争の影響を知るためには、日本の教育制度において学校間競争をどのように捉えることができるかを踏まえる必要があります。その際、小中学校である義務教育なのか、高等学校なのか、大学や大学院を念頭に置くものなのかを分ける必要があります。さらに、学校を選択する側の家計の行動への影響なのか、教育を提供する側の学校への影響なのか、それらを含めた全体への影響なのかを分ける必要があります。

学校間の競争を促す方法は、教育サービスの受益者である生徒にとって選択肢を増やすことです。選択肢を増やす方法は様々で、通学区域の拡大、バウチャーや授業料減免などの家計に対する金銭的補助、学校あるいは教育サービス提供者への補助あるいは規制緩和です。

これらはいずれも児童生徒の学校を選択肢を増やす方法です。通学区域の拡大は、ある居住地から選択可能な学校を増やす方法です。バウチャーは教育のみに利用可能な金券のことです。家計はバウチャーを利用することで私立と公立で負担する授業料が同じになるため、選択可能な学校は増えます。授業料減免あるいは無償化なども同じ作用を持ちます。学校あるいは教育サービス提供者への補助や学校設置の基準の緩和は、学校を設置することのコストを下げることで学校の参入を促し、選択可能な学校を増やすものです。

日本の教育制度を踏まえた学校間競争は次のように整理できます。義務教育である小中学校と高等学校においては、居住地域に基づく通学区域の設定と、無償である国公立と授業料の発生する私立との授業料の違いが関連します。通学区域を拡大することは選択肢を増やすことを意味し、授業料を無償化あるいは金銭補助をすることで、費用の公私差を埋めることで選択肢を拡大できます。教育サービスへの参入を促す方法は、通学区域内の学校数を増やす意味で関連する可能性があります。大学や大学院に関しては、居住地域に関わらず進学あるいは通学が可能であるため、授業料の違いが関連します。

なぜ学校間競争が促進されると教育の質が変化するのでしょうか。主に2つの効果が考えられています。1つ目はセレクション効果です。セレクション効果とは、選択可能な学校が増えることで、児童生徒は自分の特性に合った学校を選択することができるようになるものです。児童

生徒と学校のマッチングが改善することを通し、教育の質が改善する効果です。これは、仲間から受ける影響であるピア効果の変化を通す場合もあります。学校の競争条件が変化すると、それにより入学する生徒の構成は変化します。ともに学ぶ仲間が変わることで、児童生徒のパフォーマンスが変化する場合です。

2つ目は資源効率化を通した効果です。競争に晒された結果、他の学校との差別化を図るために、学校は自身を持つ学校資源を効率的に活用しようとしています。その結果、教育の質が改善する状況です。しばしば、「競争により質が改善する」主張はこの状況を念頭に置いています。

学校間競争を促進するために学校の選択肢を増やすことのポジティブな側面を強調すると以下ようになります。児童生徒が通える学校の選択肢を増やすことは、それぞれの生徒にとってより自分に適した学校に通うことができるようになります。また、児童生徒が通える学校の選択肢が増えて学校間競争が激化することで、各学校は生徒獲得のために多くの資源投入や効率化を迫られます。このことで全体として学校の生産性が向上することになります。あくまで、学校選択を行うかは個人の選択に委ねられているため、その権利を行使するかは自由です。実際に、選択する権利を行使しない生徒にも恩恵がある可能性があります。

② 学校の競争はネガティブな側面を持つこともあります。選択肢の拡大は、学校間の格差・層化をもたらし可能性です。いわゆる「学校の序列化」です。人気のある学校がますます人気となり、人気のない学校の児童生徒数が減る可能性があります。あるいは、学生にとって学校を選ぶのは学生同士の交流が目当てであり、その学校に入学するために努力はするものの、学校側から見れば「入れ物」を用意するだけで十分であり、その中身を充実させる努力をあまりしなくなる可能性があります。

このように、学校選択が学校の努力を促すかどうかは、状況次第といえます。

学校間競争の促進は、家計の選択、生徒への影響、学校への影響を通して、学校の質を変化させる可能性があります^③が、その効果はエビデンスにより確かめられる必要があります。学校間競争に関するエビデンスを得るには2つの困難な点があります。

困難さの1つ目は因果関係を示すことの難しさです。たとえば、学校間競争の激しい地区とそうでない地区を比較したところ、前者の方の学校の質が高いという結果が出たとしましょう。学校間競争の激しい地区に教育熱心な世帯が多く住む傾向があれば、学校間競争の効果が真の効果よりも大きめに計測されてしまうかもしれません。

1つ目の問題を解決する方法は、制度が変わることを利用した自然実験を用いることです。たとえば、1981年のチリにおける国家規模のバウチャー制度の導入により大量の私立学校が参入することで学校間の競争度が変化した状況や、1990年のスウェーデンでの大規模な改革により政府の規制を受けない学校が急増して学校間の競争度が変化した状況があります。国家規模だけではなく、地域単位に着目する方法もあ

ります。たとえば、イスラエルのテル・アビブ域内の公立学校選択の自由化、フロリダ州の低所得者向けのバウチャー導入、ノースカロライナ州やマサチューセッツ州でのチャータースクールの規制緩和などで、学校間の競争度が変化した状況を利用する方法です。

困難さの2つ目は、先の解決方法と関係しています。先ほど、因果関係を明らかにするために、米国や北欧で生じた制度変化を利用する方法を紹介しました。米国や北欧で生じた制度変化を利用して得た結果が、日本で当てはまるかは自明ではありません。教育制度は時代・地域で大きく異なるからです。そのため、日本で学校間競争の促進がどのような影響を持つかを知るためには、日本の教育制度や時代背景に則したエビデンスから確かめられる必要があります。

日本における学校間競争に関するエビデンスを見てみましょう。吉田あつし・元筑波大教授らは、2002年の足立区での公立中学校選択制度の導入による効果を分析しました。その結果、いわゆる高収入の職業従事者の比率が高い地域の生徒は私学か得点の高い公立学校を選択し、それ以外の地域の生徒は制度導入後に公立学校を選択する傾向が強いことを発見しました。赤林英夫・慶應大教授らは、東北8県の高校別のデータを用い、私立学校に通う生徒の授業料減免が、生徒の中退率を抑制する可能性を明らかにしました。

筆者らは、公立高等学校入学試における通学区域の撤廃が生徒の進学パフォーマンスに与える効果を分析しました。通学区域の撤廃は、公立高校の大学進学率を向上させるものの、その効果は、通学区域の撤廃後に入学した生徒だけではなく、撤廃前に入学した生徒に対しても影響したことを示しています。また、公立だけではなく私立にも影響を与えています。これは、セレクションだけではなく、競争による学校の質を向上させる効果があった可能性を示唆しています。

学校の質向上は、子どもへの教育アウトカムだけではなく、それ以外の効果をもたらすことが知られています。それ以外の効果の1つは、^①地価への影響です。

学校の質と地価は、土地に対する需要と供給の関係から示されます。図6は土地市場を示すグラフであり、横軸を土地の量、縦軸を地価とします。土地の供給は一定すなわち、横軸が数量で縦軸が価格の図において、垂直な線だとします。土地の需要は、価格が高いと需要量は減少する、右下がりの線とします。ある時点での土地の需要曲線と供給曲線の交わる点をAとすると、点Aでの地価が決まります。今、ある地域の学校の質が向上すると、高い学校の質を目指して、子を持つ親はその地域に引っ越しをしようと考えます。すると、ある地域の土地に対する需要は増大することになるため、需要の線は右側にシフトします。土地の供給が一定であれば、土地の需要が増大した後の需要曲線と供給曲線が交わる点はBに移ります。需要の増大に対応するように地価は点Bで地価は上昇します。つまり、学校の質の高さは、その地域の魅力を高めることを通して、その魅力の部分が地価に帰着します。

学校の質と地価を検証した研究は世界各国で実施されており、学校の質の向上は地価を引き上げる傾向が観察されています。日本においては、東京都特別区や足立区を対象とした研究で、私立中学校への進学率やテストスコアで代理した学校の質の高さと、地価は正の関係があることを示しています。

地価だけではなく家賃に対しても影響があるようです。黒田雄太・大阪公立大准教授は、松江市のデータを用い、全国学力テストのスコアで代理される学校の質と家賃の関係を検証しています。家賃に影響を与える要因は、学校の質だけではなく様々であり、様々な要因は必ずしもデータに反映されません。ただ、学区の境界に着目すると、土地に関する特徴はよく似ているが、異なるテストスコアを持つ学校が存在することになります。この場合、境界で区切られた各エリアを比較することで、学区の境界周辺ではよく似た特徴を持つ地域だが、異なる学校の質を保つ地域を比較できます。分析結果によると、テストスコアが10%上昇すると、家族向けのアパートの家賃は1・7%上昇するものの、単身者向けのアパートの家賃は変化しないことを発見しています。

学校間の競争は、その目的である教育の質向上だけではなく、格差や地価の変化にまで影響します。競争の持つ様々な側面をエビデンスにより確かめることが重要です。

（佐野晋平『教育投資の経済学』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

語注

- エビデンス……証拠。裏付けとなる客観的事実。
- アウトカム……成果。効果。

問一 傍線部①「公立学校の質向上を目指し、学校間競争を促進することが目標とされるがあります」について、次の各問いに答えよ。

I どのようにしたら学校間の競争は促進すると考えられるのか。その説明として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア 生徒が通える可能性のある学校の数を増やす。

イ 教育のみに使える金券を配布する。

ウ 学校が設置しやすいように規制緩和を行う。

エ 教員の勤務校を固定化する。

II なぜ公立学校の質の向上を目指すために、学校間での競争を促進するのか。その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 通学区域が拡大することによって多様な児童生徒の入学が期待できたり、競争によって学校の数が減り効率的な学校運営ができたりするため。

イ 学校の競争条件の変化によって入学する生徒の構成が変化し、児童生徒のパフォーマンスが向上したり、学校の土地の価格が上がって周辺環境が改善したりするため。

ウ 選択可能な学校が増えることで児童生徒と学校のマッチングが改善されたり、競争に晒されるために学校が資源を効率的に活用したりするようになるため。

エ 学校の選択肢が増えることで生徒は自分に適した学校に通えるようになってやる気が向上したり、効率的に資源を活用した結果、学校の規模が拡大していったりするため。

問二 傍線部②「学校の競争はネガティブな側面を持つこともあります」とあるが、その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 人気のある学校にも定員があるため、公立中学といえども入学試験を行うようになる。

イ 学校の間で格差が生じ、人気のある学校と不人気学校の差が顕著になる。

ウ 学校を選ぶ理由が友人との交流になってしまい、入学後は生徒が学習の努力をしなくなってしまう。

エ 人気のある学校は自然と生徒が集まってくるため、生徒獲得のための資源投入や効率化をしなくなる。

問三 傍線部③「学校間競争に関するエビデンスを得るには2つの困難な点があります」とあるが、その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 教育熱心な世帯数の差異など、比較対象となる地域の傾向が同一であるとは限らないため因果関係を示すことが難しい点と、海外の事例を日本に当てはめてよいかが明らかではない点。

イ 教育熱心な世帯数の差異など、比較対象となる地域の傾向が同一であるとは限らないため因果関係を示すことが難しい点と、学費に付する奨学金の制度が学校選択に及ぼす影響を理解しなければならない点。

ウ どの地域にも教育熱心な世帯は一定の割合で存在するものの単純に比較できない点と、米国や北欧での競争度の変化は日本では役に立たない点。

エ どの地域にも教育熱心な世帯は一定の割合で存在するものの単純に比較できない点と、日本では公立校のデータは充実しているが私立校のデータは不足している点。

問四 傍線部④「地価への影響」とあるが、その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 学校の質が向上すると、その地域の土地の需要が増加し、地価が下降する。

イ 学校の質が向上すると、その地域の土地の需要が増加し、地価が上昇する。

ウ 学校の質が向上すると、その地域の土地の供給が増加し、地価が上昇する。

エ 学校の質が向上すると、その地域の土地の需要が減少し、地価が下降する。

問五 本文の内容に合致するものを記号で示せ。

ア 学校間の競争は学校の発展につながり、全ての生徒にとって有益である。

イ 学校間の競争を促す方法は、生徒にとっての選択肢を増やすことである。

ウ 学校間の競争は公立学校にのみ適用され、私立学校は関係がない。

エ 学校間の競争よりも、保護者の教育への熱心さが地価や家賃に影響を与える。

二 次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、以下の各問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

仕事を父親、家事・育児を母親の領域とする性別役割分業は、核家族を基本とする近代家族の特徴とされる。日本では明治期に「良妻賢母」規範が登場し、都市部の新中間層を中心に、女子中等教育を通じて母性イデオロギーが浸透していった。母性イデオロギーとは、母親という役割の持つ絶対性や特殊性を強調することで、女性に母親として生きることを促す圧力である。それは、女性自らが就労を含む多様なライフスタイルの可能性を閉ざし、一方で子どもを産み育てることを自身の役割として内面化する作用をもっていた。母親は、子どものためならば献身や自己犠牲を厭わ^{いと}ない存在として理想化されていた。

性別役割分業を前提とした母性イデオロギーは、近代家族を構成する「子ども中心主義」と組み合わせることで、一層強化された。子ども中心主義とは、子育てや教育をする際に、育てる側の親や教師の教育的意図よりも、子どもの意思や人格を重視し、子どもの存在を中心に据えて子育てを行う考え方のことである。20世紀初頭の欧米では人権意識の高まりや発達心理学や教育学の発展の過程で、子どもの「自発性」や「主体性」を重視する流れがつけられ、日本でも大正期には子どもの「純粹無垢^{むく}」な「子どもらしさ」を賛美する童心主義が新中間層の間に浸透した。こうした子ども観は子どもを中心とした家族関係や家族の営みとも重なり合い、「子ども中心主義」として近代家族に浸透していった。子ども中心主義は、親が子どものために尽くすという、「子どものためイデオロギー」とも重なる。吉田^{よしだ}は、子ども中心主義が、「子育てを行う母親が育児専従の生活を送る上で、価値のある崇高な動機」となるとして、母性イデオロギーとの強い結びつきを指摘する。

子どもの欲求や要望に寄り添う育児法は先進国に共通してみられるが、夫婦の情緒的絆^{きずな}を重視する欧米諸国と比較すると、日本では子どもを中心とした家族の関係性が強い。言説レベルでも実態レベルでも「母子密着」と「父親不在」が顕著に浮かびあがってくる。母子健康手帳副読本などの内容分析を行った品田^{しなだ}は、1980年代に添い寝や添い乳といった日本独自の子育ての風習と、西洋の近代の子育て法が取り入れられ融合した結果として、子どもの要求に徹底的に寄り添う「超日本式育児」が形成されたと論じる。また、元橋^{もとばし}は母子健康手帳と副読本の内容分析から、2000年代以降は育児者呼称が「親」や「ふたり」に変化していくことを指摘する。しかし、実際は子どもの状態に対する母親の認識を手帳に書きこませる契機がふえ、濃密な母子関係や母親の子育て責任をより強く要請する規範が形成されていることを考察した。以上の研究は、性別役割分業規範、母性イデオロギー、子ども中心主義が重なり合って、母親業の負担が近年ますます重くなっている日本社会の特徴を明らかにしている。

では、当の母親たちは母性イデオロギーをどのように受けとめているのか。女性の性別役割分業意識についての研究は豊富にあるが、それら

は女性のジェンダー意識が時代とともに一部変容していることを示している。1960年代から70年代にかけては社会経済的要請のもとで政府が「三歳児神話」^(注)を意図的に強調した時期であり、専業主婦の数がピークを迎えて母性イデオロギーの支持層は厚かった。しかし、1990年代半ばには、共働き世帯が専業主婦世帯の数を抜く。25〜39歳の女性を対象に実施した1995年のアンケート調査から、船橋^{ふなばし}は「母親役割意識のうち、あからさまな『母性イデオロギー』は崩れて、手作り幻想も揺らぎ、便利な育児用商品の消費に抵抗がうすれてきている」と分析する。一方で「三歳児神話」、「母親が子どもの勉強を見る義務感」、「子どもを他人に預けることへの抵抗感」は依然として強いことも指摘された。つまり、子どものための自己犠牲を求める母性イデオロギーへの支持は揺らぎつつも、特に子どもの幼少期における世話や、教育に対する母親の責任感は健在であった。

この結果は、性別役割分業意識の多元性を指摘した大和^{やまと}の知見と一致する。40代の女性たちへのアンケート分析の結果、女性たちは「男は仕事、女は家事育児」という「性による役割振り分け」は否定したもの、「三歳児神話」や「母性愛」といった母親役割意識については肯定する傾向がみられた。大和は後者を「愛による再生産」意識と呼び、それは性別による役割の固定化を否定する意識と矛盾することなく成立し、女性が愛情をもって家事と育児に専念することを正当化する。また、男性側の意識に注目した小笠原^{おがさわら}は、多くの男性は女性が就労することに異論を唱えなくても、自らの稼ぎ手としての役割や、妻の家事・育児の責任者としての役割には固執していると指摘する。これらの研究は、母性イデオロギーが依然として女性を家事・育児へ、男性を仕事へと向かわせる力として働いていることを示している。

一方で、専業主婦やパートの女性に比べると、常勤の女性で性別役割分業意識が弱まっていることを確認できる。2018年に実施された「第6回全国家庭動向調査」によると、「男は仕事、女は家事育児」については8割近くが否定し、夫も家事育児を担うべきであるという意識が高い。「三歳児神話」への支持率は専業主婦の場合7割なのに対し、常勤では5割と低くなる。母親が働く場合、父親にも子どもの世話としてけ・教育を求め、「両性平等」、「平等両立」志向が強いことが明らかにされている。

興味深いのは、「夫や妻は、多少自分のことを犠牲にしても、子どものことを優先すべきだ」という項目への回答である。常勤、パート、自営、専業主婦の間でほとんど支持率に差がなく、職業に関わらず8割を超えている。つまり、働く女性の間でも子ども中心主義は非常に強く維持されているということである。

これらの研究からは、働く女性たちが性別役割分業規範を前提とした母性イデオロギーや子ども中心主義に対してどのような意識をもっているかを、より具体的に描き出す必要性が提起される。

(額賀美紗子・藤田結子『働く母親と階層化』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。)

語注

・三歳児神話……子どもの性格や能力は三歳までに形成されるといふ考え方。

【文章Ⅱ】

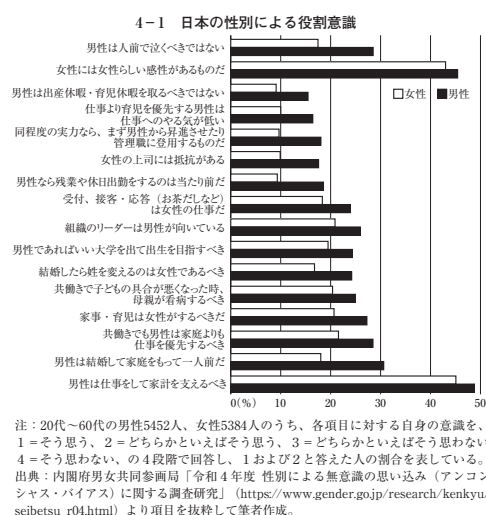
実証研究の紹介の前に、二〇代から六〇代の男女に対して、内閣府男女共同参画局が実施したステレオタイプの調査を紹介します。なお、この調査は『令和4年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシヤス・バイアス）に関する調査研究』と銘打っています。しかし質問は、回答者の意識的な思い込みを聞いているので、「無意識の思い込み」に関する調査というのは正確でない気もします。ですから、単なる思い込みに関する調査として取り上げます。

この調査では、いくつかの性別役割に関する思い込みの質問をしています。そのなかで、とくに興味深いものをグラフにしました（4-1）。二〇二一年六月に育児・介護休業法が改正されて男性の育児の重要性が強調されるなか、男性の二七％、女性の二一％が、家事・育児は女性がするべきだと考えています。たとえ共働きであつても、男性の二五％、女性の二〇％が、子どもの看病は女性がすべきだと考えています。

また、男性の一七％、女性の一〇％が、仕事より育児を優先する男性を仕事へのやる気が低いとみなしています。この状況では、たとえ法的には育児休業が取得できたとしても、上司などの評価を気にして現実には取得できないでしょう。

従来のジェンダーによる差別と、ステレオタイプによる差別との違いは何でしょうか。伝統的な経済学では、ジェンダーによる差別を「嗜好（好み）による差別」と「統計的差別」で説明してきました。

好みによる差別を理解するために、新しく従業員を一人雇うケースを考えてみましょう。同じような能力の候補者が二人いて、一人は男性、もう一人は女性であるとしてします。この場合、雇用者が男性のほうが単に好ましいという理由で男性を雇うことが、好みによる差別にあたります。また、これまでの従業員をみると、たとえば男性は離職率が低いけれど、女性は結婚や出産などにより離職率が比較的高いとなります。雇用者は、せっかく仕事を覚えてもらった従業員には離職してもらいたくないので、男性を雇うと決めたとしてします。この場合は、男性と女性を雇うこ

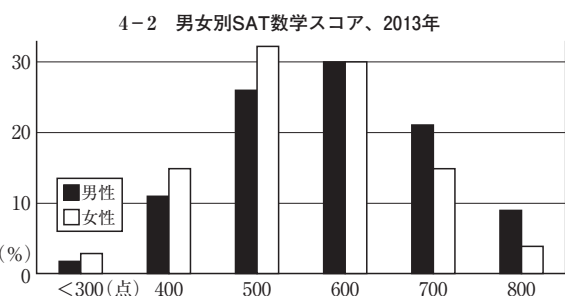


とについて雇用者にとくに好みによる違いはありませんが、これまでの経験から男性のほうが離職の可能性が低いということで雇うことを決めました。これは統計的差別と呼ばれます。

男性のほうが離職率は低いことが事実であり、その違いを正しく認識していれば、それは統計的差別であって、ステレオタイプによる差別ではありません。ただ、男性のほうがたしかに離職率は低いけれど、男女の離職率の違いはわずかであることも考えられます。この場合、実際の違いはわずかであっても、それがあたかも男性もしくは女性を代表しているかのようにとらえてしまえば、ステレオタイプによる差別となります。

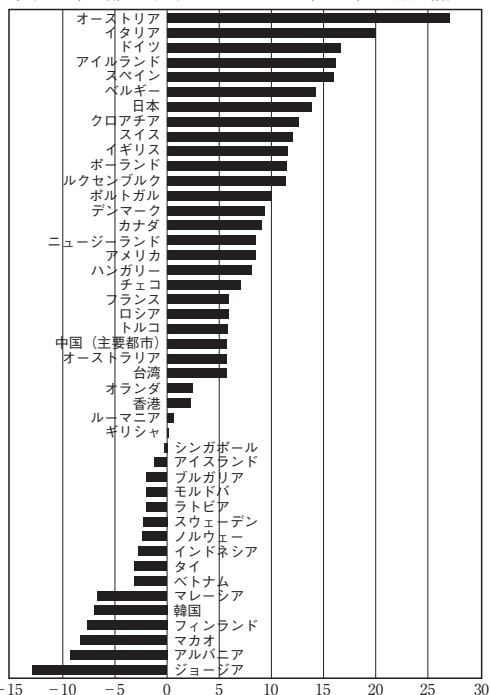
4-2は、アメリカの大学進学適正試験（SAT）における数学のスコアについて、男女別に分布を表したものです。たしかに男性のほうが女性より数学のスコアは高く、平均値も高いのですが、ほとんどの学生のスコアには重なる部分も大きく、上位で差が出ている程度ということがわかるかと思えます。実は、これは分布にそれほど男女の違いはないのに、一部の目立つ特徴に引張られて、いかにもそれが男性と女性の特徴の違いであり、ステレオタイプのようにとらえられてしまう実態を表しています。

このようなステレオタイプによる決めつけや思い込みは、実は「わずかな事実（＝Kernel of Truth）」からもたらされていることがわかってきました。



出典：Bordalo et al. (2016) のFigure I。

4-3 中学生（15歳）の数学テストスコア（PISA）の男女格差



注：OECDが実施している学習到達度調査（Programme for International Student Assessment：PISA）テストデータが入手可能な欧米諸国およびアジア諸国（OECD加盟国およびパートナー諸国）について、男子から女子のスコア平均を引いたもの。マイナスの数値は女性のほうが得点が高いことを意味する。
出典：2015年PISAデータ（<https://www.oecd.org/pisa/>）をもとに筆者作成。

STEMと呼ばれる数学やサイエンスの理系分野について、多くの人は、女性より男性のほうが得意だと思っているでしょう。このことを男女の生まれつきの違い、もしくは脳の構造の違いのように思っている人も多いでしょう。

4-3は、中学生男女の数学テストのスコアの差を、欧米諸国とアジア諸国についてみたものです。これを見ると、女子のほうが数学テストのスコアが高い国もありま

す。生まれつき、生物学的な違いというのは説得力に欠けるでしょう。ジェンダー・ギャップ指数でのランク付けが高く、ジェンダー格差が小さいといわれる北欧諸国や、女性の労働参加率が比較的高い東南アジア諸国で、女子の数学の成績が男子に比べて高いことは注目してよいでしょう。

日本や多くの欧米諸国で、女性より男性のほうがSTEM分野が得意だということは、平均的には間違いではないでしょう。しかし、ここにも「わずかな事実」によるステレオタイプが作用している可能性が高いのです。要するに、ノーベル賞受賞者を筆頭に、STEM分野でトップレベルの研究成果を残している人たちが男性に偏っているために、STEM分野全体で大きな男女の差があるような錯覚が起こっている可能性があります。

日本ではあまり当てはまらないですが、欧米諸国ではSTEM分野の職種のほうが、いわゆる人文系より所得が高い傾向にあります。このためこのSTEM分野を得意とするかどうかの男女の違いが、男女の所得格差にも影響しているといわれています。

男女のあいだにSTEM分野を得意とするかどうかの違いが本当に存在し、それによって学部の専攻の違いや、所得格差が生まっているなら、それは男女ではなく能力の違いによる所得格差なので、仕方がない面もあるでしょう。しかし、実際には能力差はほとんどなく、STEM分野を専攻するかどうか、結果としてSTEM分野の職業に就くかどうか、思い込みによって影響を受けているとしたら、その思い込みを是正する余地はあるでしょう。

オックスフォード大学のペドロ・ボルダロ教授たちは、アメリカの大学の学生たちを対象に実験を行い、「^④「わずかな事実」が思い込みに与える影響を実証しました。学生たちには、機械、数学、言語能力、美術などさまざまな分野について、自己評価および他人に対する評価を行ってもらいました。

結果は、典型的に男性が得意だと思われる分野では、実際に得意かどうかの違いはなかったとしても、女性は自己を過小評価する傾向にあることがわかりました。逆に女性が得意だと思われる分野では、男性の自己評価が低くなる傾向でしたが、女性ほどではなかったようです。

実験の一部では、学生同士ランダムにペアを割り当て、さらにランダムに選んだ半数の学生には相手の性別を教えました。これにより、相手の性別によって評価が変わるかの測定が可能になります。結果は、他人の評価も自己評価とほぼ同じでした。つまり、男性が得意だと思われる分野については、相手が女性というだけで評価が過小になったのです。

興味深いことに、相手の性別がわかっている場合とそうでない場合、またわかっている場合に相手が男性であるか女性であるかによって、自

己評価に影響があることもわかりました。とりわけ女性は、相手が女性である場合に比べて男性である場合、男性が得意とされる分野について自己評価が相対的に下がりました。

この理由をボルドロたちは、ジェンダーを意識しない環境、つまり自分が女性であって相手も女性である場合よりは、ジェンダーを意識する環境にいるほうが、ステレオタイプの影響を受けやすいと結論づけました。

日本の首都圏の伝統的な私立中高では、男子校と女子校に分かれることが多いですが、これにはステレオタイプからの影響を受けにくい効果があるのかもしれませんが。実際に女子校にいる女子は、数学の成績は男子とさほど変わらないことがわかっています。

(牧野百恵『ジェンダー格差』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。)

問一 傍線部①「母性イデオロギーが浸透していった」とあるが、母性イデオロギーについての説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 母性イデオロギーは時代とともに、子どもの意思や人格を重視する子ども中心主義に変化していった。

イ 母子健康手帳副読本で「母親」が「親」となるような変更がされ、母性イデオロギーは弱くなった。

ウ 母性イデオロギーは母親の自己犠牲を求めるため、25～39歳の共働き世帯からは全く支持されなくなった。

エ 40代の女性たちは、性別役割による分業については否定的であるものの母親役割意識には肯定的であり、母性イデオロギーは健在である。

問二 傍線部②「ステレオタイプのようにとらえられてしまう実態を表しています」とあるが、その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 男女の数学のスコアに大きな違いがあるところから判断される。

イ スコア分布に男女の差はそれほどないのに、一部の特徴から判断される。

ウ 男性のほうが女性よりも、スコアも平均値も高いところから判断される。

エ 男女のスコアを無視して、思い込みから判断している。

問三 傍線部③「その思い込みを是正する余地はあるでしょう」とあるが、なぜ是正する余地があると考えられるのか。その理由として最も適

当なものを選び、記号で示せ。

ア 統計差別は誤ったデータによって行われており、正しいデータを提示すれば差別は解消されるから。

イ 男女の能力に関する思い込みは、「わずかな事実」によるステレオタイプによって錯覚しているだけの可能性が高いから。

ウ 男女の能力差は生物学的な違いによるものが大きく、STEM分野の差は思い込みではなく事実であるから。

エ ジェンダーに関係なく誰でも努力すれば成功できる環境が用意されており、能力の違いは関係ないから。

問四 傍線部④「『わずかな事実』が思い込みに与える影響を実証しました」とあるが、これによって何が明らかになったのか。その説明とし

て最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 実際の能力に関係なく、ステレオタイプが評価に影響するということ。

イ 男女共に同じくらい、ステレオタイプの影響を受けやすいということ。

ウ ジェンダーを意識しない環境にいる方が、自己評価が低くなるということ。

エ 「わずかな事実」によってステレオタイプとジェンダーが生まれるということ。

問五 次は、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで二人の生徒が読後感を話し合っている様子である。これを読み、後の問いに答えよ。

生徒A…【文章Ⅰ】で日本の伝統的な家族観について学んだけれど、とても興味深かった。明治期からの『良妻賢母』という考え方が、女性に対して母親としての役割を強く押し付けているっていう話だったね。母親は子どものためなら自己犠牲を厭わない存在として理想化されてきたんだって。

生徒B…そうだね。現代でもまだ性別役割分業の影響は強いよね。母親が育児や家事を担当するのが当たり前とされて、男性は仕事に集中するべきだっていう風潮が残っている。例えば、父親が育児に参加することが少なく、母親に負担が集中していることも問題だよね。

生徒A…確かに。母性イデオロギーと子ども中心主義が重なり合って、母親の負担が増えているって資料にも書いてあった。子どもを中心に家族関係が形成されるから、母親が子どものために尽くすのが当たり前になってしまう。

生徒B…それに対して、現代の調査では、性別役割分業意識が少しずつ変わってきていることもわかってきているね。特に共働き世帯が増えてきて、父親も家事や育児に参加することが期待されるようになってきた。でも、それでもまだ「三歳児神話」や母親の責任感が強く残っていることも事実だよね。

生徒A…そうだね。内閣府の調査からも、家事や育児は女性がすべきだという考えが根強く残っていることがわかるね。特に、共働きであつても、女性が子どもの看病をするべきだと考えている人が多いから、女性の就職活動は難しいね。

生徒B…データを誤って理解して、「子育てや家事は女性がするもの」と考える人が多いから、実際にそうなんだろう。だから仕事に穴をあける女性は採用しない」なんてこともあるかもしれない。

生徒A…そういうのを ☐ X というんだね。

生徒B…正しい理解がないと男性が育児休業を取得するのが難しくなるし、女性も仕事を続けるのが難しくなるよね。アメリカの大学生対象の実験でも、男性が得意とされる分野では女性が自己評価を低くする傾向があるっていう結果が出ていたから、就職先にも影響が出るみたいだね。

生徒A…大学の学部を選ぶ段階、それよりも前の高校で文系理系を選択するところで影響が出る可能性があるから根深い問題だね。

生徒B…ただ、そのステレオタイプが解消されて能力に差がないことがわかって、就職に影響がなくなっても、 ☐ Y などがあるから、やっぱり働く中での完全な男女平等は難しそうだね。

I 空欄 ☐ X ☐ に入るものとして最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 無意識の思い込み

イ 嗜好による差別

ウ 統計的差別

エ ステレオタイプの差別

II 空欄 ☐ Y ☐ に入るものとして最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 日本は女性が愛情をもつて家事と育児に専念することを正当化する傾向

イ 子どもの洋服や持ち物は手作りでないといけないという思い込み

ウ 女性よりも男性のほうが、どの年齢においても離職率は極めて低いという事実

エ 女性は、男性の上司や先生の前では自分が得意な能力の自己評価が低くなる傾向

三

次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、以下の各問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

罵詈雑言ばりぞうごんはどうも人間の深いところに根ざしているということが分かりました。悪口はぼつと出の新人でも、最新ガジェットでもないわけです。その点をさらに深く検討するため、人類学の民族誌を利用します。人間を研究するのが人類学で、民族誌というのは、少数民族のコミュニティなどに自ら飛び込んでいき、生活をともにすることによって「フィールドワーク」という研究手法の一種で、「参与観察」とも呼ばれます）、コミュニティの社会・経済・文化などを調べた報告書のことです。

人類学者たちは、現在は少なくなりつつある狩猟採集民についても数多くの調査を行ってきました。^① 狩猟採集民というのは、一箇所に定住せず、定期的に移動するキャンプを拠点として生活し、農業ではなく、狩りをしたり、木の実を集めたりして食物を得ている人々のことです。だいたい、ひとつのキャンプは三〇人くらいでできていて、複数の家族が一緒に住んでいます。ときどき、複数のキャンプが集まって取り引きや祭りを行います。そのときには、一五〇人や二〇〇人くらいの人々が集まります。

また、そうしたキャンプには、誰が殿様で誰が家臣といった、明確な序列関係が存在しないというのも狩猟採集民族の特徴のひとつです。「首長」とか「村長」とか「大物」^{ビッグマン}と呼ばれるような、力を持った人物が決められていないのです。もちろん、知識と経験のある老人がアドバイスをする、ということはありませんが、その人が「長老」などと呼ばれるわけではないのです。少なくとも明示的には権力関係がなく、食事を分け合う非常に平等なコミュニティの中で暮らしています。こうした、狩猟採集生活を送る人々の暮らし方は、人間が何万年前に行っていた暮らしにかなり近いと考えられています。

デジタル機器とストレスに囲まれている現代人と比べて、そうした「自然な」「あるがまま」の暮らしをしている狩猟採集民の人々は、さぞ悪口を言わないだろう、と思われるかもしれませんが、実は、まったくそのようなことはない^②と民族誌が伝えています。狩猟採集民は悪口を言いまくるのです。

まず、エピソードをひとつ紹介します。カナダの人類学者リチャード・リーは、一九六〇年代に、アフリカ大陸南部のカラハリ砂漠に住むサ人^{サン}人を調査していました。ある年のクリスマスに、リーは日頃の感謝をするために、調査に協力してくれているキャンプの人々に牛を買ってプレゼントしようと思いました。それは五〇〇キロを超えるような立派な黒い牡牛^{おし}で、いつものキャンプの人だけでなく、クリスマスのために集まってくる複数のキャンプの人たちみんなを満足させるほどの、たくさん肉が取れるはずのものでした。

最高のプレゼントが準備できたぞ、と思っていると、リーはキャンプの人からの意外な反応に困惑しました。牡牛のことを伝えたと、「はあ？

私たちにそんな骨の袋を食わせる気なの?」「やせっぱちで肉なんかないよ」「ツノでも食わせる気なの?」とくすくす笑われたのです。他にも、「死にかけ」「年とった残骸」「お前はここに何年も住んでるのに何にも分かってない」「肉の取り合いで争いが起きるぞ」とまで言われてしまい、リーは自分は牛を見る目がなかったのだとがっかりしてしまいました。

ところが、クリスマス当日、牡牛が引き出され実際に解体されてみると、やはりリーが最初に思った通り、痩せているところかたっぷり脂が乗っており、たくさん肉が取れました。集まった人々はニコニコと喜んで踊り、二日二晩にわたって、肉はシチューとしてふるまわれました。リーは安心しましたが、なんでそんなに牡牛のことをバカにされたのだろう、自分は白人のよそ者だからかつがれたのかなと思い、後からそのことを聞いてみました。そして分かったのは、それは冗談などではなく、狩猟の腕前や、持ってきた獲物についてバカにするのが、サン人の習慣のひとつだったのです。平等に分け与えられた肉をもぐもぐしながらでも、「これはひどい!」「何の価値もない!」などと言うのがごく当たり前だったのです。

どうしてそのようなことをサンの人々はするのでしょうか。それは「傲慢さ」のためだと、リーは信頼している人物から教わりました。狩りがうまくいくと、若者はすぐに調子に乗って大物ぶってしまうので、それをいさめるために獲物のことを小馬鹿にするのです。「私たちは傲慢をする人間を認めません。そのような人は、いつか、その自尊心のせいで誰かを殺してしまうからです。だから、獲物がたいしたことがない、ということに常について、その人の頭を冷して、穏やかな人間にするのです」と。

謙虚であることが、サンの人々にとってはとても重要だったのです。大きな獲物を射とめた日でも、周りから聞かれるまでは、決してそのことを言わず、いざ「狩りはどうだった?」と聞かれたときに、「いやあ、今日もダメだったよ。こんなに小さな成果しかないよ」と言いながら、大成功の収穫を見せる、というのが、サン人がすべきふるまいなのです。

このサン人の習慣に、とても馴染みがあるとは思えないでしょうか。(中略) お土産を渡すとき「つまらないものですが」と必ず口にして、自分が渡すものを誇らない習慣があります。そこまで言わなくても、と思わなくてもですが、そこには、調子に乗ってるわけではないですよ、大物ぶったりしませんよ、というメッセージが込められています。慎重深さを示すことの重要さは、どの人間社会にもいろいろな形で現れるようです。

悪口を言うことによって、誰かが調子に乗るのを防ぎ、大物、すなわち権力者が生まれるのをあらかじめ防ごうとする、という行為は、サン人だけに見られるものではありません。平等主義的な狩猟採集民において、言語を使ったある種の攻撃が、地域を超えて幅広く観察されている⑤。

まず、狩猟採集民は人々についてのおしゃべり、つまりゴシップをよくしているという観察があります。砂漠や草原の中で、三〇人程度と

いった小さな集団で暮らすとき、お互いの協力が必要になります。私たちのように、「今日は自分は軽くコンビニで食事を済ますね〜」というわけにはいかないのです。互いに採集した食糧を分けて、人手が必要な作業も分担して、はじめて生活が成立します。ですので、おしゃべりをして、お互いのことについて共有し、コミュニティの役割からはみだす人がいないかどうかチェックする必要があります。

大きく和を乱すような人がいたら、それはどうなのか、と介入しないといけません。たとえば、狩りの獲物は平等に分けるという習慣があるのに、明らかに自分の家族だけその取り分を大きくしたり、こっそりと自分だけのものにしたとすると、周囲の人々からの介入の対象となります。そして、ことばによる牽制^{けんせい}が、もつと深刻な物理的介入よりも、より頻繁に用いられる手段なわけです。

最初は揶揄^{やゆ}や冗談が使われます。その次は、もつとあからさまなのしりのことばが使われます。たとえば、砂漠ではなく、ジャングルに住んでいるムブーティー・ピグミーと呼ばれる人々に関する民族誌には、自分だけたくさん獲物が取れるようにズルをしていた男が、「肉を盗むお前はケモノだ!」と厳しく抗議されたという記録があります。リーによるサン人のフィールドワークには、もつとも攻撃度が高いことばとして、性器を意味する単語など、性に関する表現を使うことが記されています。

そうしたことばのやりとりが問題を解決しないとすると、次はより強行的な手段が取られます。その対象となる人に向かって、一切話をしない、取り引きをしないといった形で、一時的にキャンプから離れさせるというものです。キャンプから離れることにはいろいろな不利益がありますが、それ以上の争いを発展させないために、頭を冷やす期間が設けられるわけです。

さらには、人類学者が調査できた範囲でも、無視をするといったこと以上に、物理的な実行使、暴力や殺害なども行われている、ということが分かっています。もちろん、そのような事例が多いわけではなく、狩猟採集民の人々が都市に住む人間よりも暴力的だというわけではありません。ことばによる攻撃は、物理的暴力にうったえるもつと前段階に使われ、コミュニティの中で権力者が生じないために用いられるのです。

(和泉悠『悪口ってなんだろう』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。)

【文章Ⅱ】

「非難」や「批判」ということは、世間的にはあまり評判が良くないようです。しかし、それは適切な非難と、誹謗や難癖ひぼうといったことばによる攻撃とをはっきり区別することに失敗しているからだと思えます。^④ここでは、その区別をつけてみましょう。

私たちはすでに悪口一般を特徴づけることに成功しました。誹謗や罵倒、あるいは陰口や中傷などは、細かい条件が異なる、悪口一般の変種として理解することができます。たとえば、「陰口」は基本的に悪口と同じで、誰かについて劣っている、ランクが下だと言うことですが、「言う側は、標的自身が発言を聞いていないと思っている」という条件を追加する必要があります。「陰」で言わなければ（あるいは少なくともそう思っていないければ）、「陰口」にはなりようがないからです。

非難をするとき、誰かに非がある、良くないところがあると指摘することになるため、悪口のように優劣を示してしまう、と思われるかもしれません。しかし、適切な非難は単に人の劣ったところを指摘するものではないのです。

適切な非難は、「後ろ向き」(backward looking)であると同時に「前向き」(forward looking)である、と言われます。まず、後ろ向きであるのは、過去に行った悪いことを指摘するからです。あなたはこういう良くないことをしました、しています、とできれば理由も言いつつ示します。

非難が前向き、つまり未来志向であるのは、今後どうしたらよいのか、どうすべきなのかの指針も提示して、非難の対象に、これまでのふるまいを反省して、これから変わっていく機会をも与えるからです。一種の教育の可能性を持っているため、非難は前向きであると言えます。

単なる罵倒や悪口なら、前向きな面を持つ必要がありません。標的をコミュニティの中で下位に置いて、自分の道具として利用したり、あるいはそもそも同じコミュニティから排除することが目的だからです。その人が反省しようと反省しまいと、まったく問題ではありません。出て行ってもらっただけからです。

適切な非難は異なります。非難の相手と同じ立場の存在だと考えているならば、これからもずっと同じ立場で、同じコミュニティの中で、仲良くなくてもつき合っていかなければならない人物とみなしています。それならば、もし良くないふるまいをしてきたならば、それはやめてもらい、これまでの行いを反省して、今後はそうしないようにしてもらわなければなりません。ですので、こうした方がよいですよ、そうしたら歓迎しますよ、という態度を表明しなくてはなりません。

適切な非難や批判を自分への誹謗中傷だととらえてしまう人は、非難の前向きな側面が見えていないからだと思われます。非難の後ろ向きな部分だけなら、確かに悪口や誹謗とそれほど違いはないかもしれません。いかに間違ったことをしたか、いかに正しくないのか、という指摘は、そうでない人との比較を含めると、自分が劣っていると言われていることになるからです。

見方を変えれば、不適切な非難や、意味のない叱責のようなものは、前向きな要素が少なすぎるということになります。今後どうすればいいのかの行動指針がはつきりと示されていないなかったり、あなたは同じランクの仲間であり、批判を受け入れ、反省して変化してほしい、というメッセージがまったく伝わらないような場合は、単に叱りたいから叱っていると解釈されてしまうでしょう。人間の応報感情、「目には目を！」「やられたらやり返す！」という感情を満たすただけに、ぶん殴る代わりにどなっているのだろう、と思われてしまいます。

しっかりと悪いところを指摘するという後ろ向きの部分と、教育の機会を与える前向きの部分と、そのバランスをうまく取るのは非常に難しい作業で、私自身もちろんうまくできるわけではありません。しかし、そのバランスを取ることをあきらめては、私たちはお互いを高め合うということが一切できなくなります。

同じ社会に住んでいる人間同士は、まっとうな非難や批判をやりとりすることにより、お互い何を大事にしているかを理解し、成長することができます。もし意見が違ってても、落とし所が見つかるかもしれません。それぞれがそれぞれを気に入らなければ、追い出したり殺したりして、社会から排除するのでしょうか。そんなわけにはいきません。どこにも追い出す先はありません。同じ時空に暮らしている人間同士、なんとかやりくりして、一緒に暮らしていかなければならないのです。

（和泉悠『悪口ってなんだろう』による。なお、問題作成の都合上、一部改変した箇所がある。）

問一 傍線部①「狩猟採集民」の特徴として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア コミュニティの中に明確な序列関係が存在しない。
- イ 一五〇人程度のグループをつくり生活する。
- ウ 個人主義が強く、共同作業はほとんど行わない。
- エ 独自の文字を持ち、記録を残す文化がある。

問二 傍線部②「狩猟採集民は悪口を言いまくるのです」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 悪口を言うことでコミュニティ内の結束を強めるため。
- イ 悪口を言うことで食糧の分配を公平にするため。
- ウ 悪口を言うことで調子に乗る者をいさめ、権力者が生まれるのを防ぐため。
- エ 悪口を言うことで社会的な階級を作り出し、コミュニティの秩序を守るため。

問三 傍線部③「言語を使ったある種の攻撃」とあるが、その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

- ア 物理的な暴力を行使する前段階としての牽制。
- イ 他のコミュニティに対し服従を迫る方法。
- ウ 獲物を公平に分配するための交渉手段。
- エ 社会的地位を確立するためのことばの宣伝。

問四

傍線部④「ここでは、その区別をつけてみましょう」とあるが、何と何がどのように区別をつけられるのか。その説明として最も適切なものを選び、記号で示せ。

ア 適切な非難は、単に他人の劣ったところを指摘するものではなく、今後の指針を提示して変わっていく機会も与える前向きなものだが、ことばによる攻撃は、前向きな面を持つ必要はないということ。

イ 誹謗や罵倒と、陰口や中傷はどちらも悪口一般として説明できるが、誹謗や罵倒は面と向かって相手に言うもので、陰口や中傷は相手のいないところで言うものだということ。

ウ 適切な非難は今後どうしたらいのかという指針だけを提示するため未来志向であるといえ、誹謗や中傷は悪口と同じで、誰かについて劣っていることを指摘するので後ろ向きであるということ。

エ 誹謗や罵倒は標的を定め、相手をことばによって攻撃する後ろ向きなものであり、陰口や中傷は標的を定めずに相手を攻撃するため、前向きの要素を持たないということ。

問五 次は、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を发表用のスライドにまとめたものである。发表原稿を読み、後の問いに答えなさい。

【发表原稿】

スライド１…狩猟採集民の悪口

狩猟採集民の生活

- ・定住せず、移動キャンプで生活
 - ・明確な序列関係がない平等なコミュニティ
- 悪口の役割

- ・傲慢さを抑える
- ・お互いの協力を維持するための手段

スライド２…ゴシップと言語攻撃

ゴシップの役割

- ・

X

言語攻撃の段階

- ・揶揄や冗談
- ・あからさまなのしり
- ・無視や取り引きの拒否

スライド３…適切な非難と誹謗中傷の違い

適切な非難

- ・過去の悪行を指摘し、未来の改善を促す
- 誹謗中傷

- ・単なる悪口、標的をコミュニティから排除する目的

スライド4…まとめ

悪口と非難の文化的意義

- ・傲慢さを抑え、平等を維持する

• Y

I 空欄 ☐ X ☐ に入るものとして最も適当なものを選び、記号で示せ。

A 人の噂話を仲間で共有する

I コミュニティ内の情報共有とチェック

U 言語を使った攻撃による介入

E 天気や獲物の出現率などの確認

II 空欄 ☐ Y ☐ に入るものとして最も適当なものを選び、記号で示せ。

A 問題を起こした者をコミュニティから排除する

I 悪口を言った者を自動的にコミュニティから排除する

U 適切な非難を行うことが一人前の証となる

E 適切な非難で解決しない場合にのみ、暴力を許可する

